



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

行動経済学で克服するジェンダー格差

著者	西村 智
雑誌名	エコノフォーラム
号	26
ページ	79-79
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028477

2019年
12月10日
火曜日

西村 智 教授（労働経済学）

行動経済学で克服する ジェンダー格差

本日は、ハーバード大学のイリス・ボネット教授の著書『ワークデザイン』を紹介します。ジェンダー格差をなくすのはなかなか難しいことです。なぜなら、私たちの意思決定には、意図しなくても様々なバイアスがかかっている、そのことが適切な判断の妨げになっているからです。ボネット教授は、行動経済学の知見とツールを活用して、私たちがどのようなバイアスを受けているのか、また、それらを除去するための行動デザインを提案しています。

ここで、1つのお話を聞いてください。「父と息子が交通事故に遭った。父親は死亡、息子は重傷を負い、救急車で病院に搬送された。運び込まれた男の子を見た瞬間、外科医が思わず叫び声をあげた。手術なんてできない、その子は私の息子だから、と。」少しでも混乱した人は手を挙げてください。落ち着いて考え

ると外科医が男の子の母親であることに気づきますが、混乱するのは、私たちの意識の中に外科医＝男性（父親）というバイアスがあるためです。アメリカでは女性外科医の割合は3分の1、日本では10%以下なので、私たちの脳が外科医＝男性と判断するのは不思議ではありません。このように典型的な事象に基づくイメージはステレオタイプと呼ばれます。

心理学では、私たちの思考モードは「システム1」と「システム2」の2種類に分けられます。システム1は直感的、自動的に作動し、情報を素早く評価するのに適した思考モードです。一方、システム2は、意識的な推論がベースになり、苦勞して意識を集中させないと作動しません。時間はかかるけれども、抽象的な分析と規範に基づく思考をするのに適したモードです。外科医＝男

性というステレオタイプに基づく判断は、システム1の作動によるものです。このような判断は、行動経済学では、代表性ヒューリスティクスと呼ばれます。システム1を作動させると、手っ取り早く世の中を理解できます。ですから、私たちの脳はまずステレオタイプに基づき判断を行います。ところが、やっかいなことに、一度、ステレオタイプに基づく判断がなされると、その後に入ってくる情報はすべてバイアスがかかった形で解釈されます。自身がどのくらいステレオタイプに基づいているかは潜在連合テスト（IAT）を行うことで判ります。IATで無意識バイアスの強い男性は、真に優秀な女性社員に対しても、無意識に「低評価を下し、バイアスの強い女性は、自らを「無意識に」ステレオタイプ（女性＝家庭）に縛りつけるそうです。

このような無意識のバイアスは、行動デザインによって克服することができます。70年代、アメリカの5大オーケストラでは女性演奏家の割合がわずか5%でしたが、審査員と演奏家の間をカーテンで隔てるブラインド・オーディションを導入したことで、より35%に増加しました。たった一枚のカーテンが審査員達の意思決定を変えたのです。

経済学者達は統計データに基づいて判断をすることが多いでしょう。しかし、このような「合理的な」判断にも無意識のバイアスがかかっていることが多いことを自戒の念を込めて記しておきます。興味を持たれた方は、是非ボネット教授の『ワークデザイン』を読んでみてください。